

二十五年間の文人の社会的地位の進歩

内田魯庵

青空文庫

二十五年という歳月は一世紀の四分の一である。決して短かいとは云われぬ。此の間に何十人何百人の事業家、致富家、名士、学者が起つたり仆れたりしたか解らぬ。二十五年前には大外交家小村侯爵はタシカ私立法律学校の貧乏講師であつた。英雄広瀬中佐はまだ兵学校の寄宿生であつた。

二十五年前には日清、日露の二大戦役が続いて二十年間に有ろうと想像したものは一人も無かつた。戦争を予期しても日本が大勝利を得て一躍世界の列強に伍すようになると思像したものは一人も無かつた。それを反対にいつかは列強の餌食となつて日本全国が焦土となると想像したものは頗る多かつた。内地雑居となつ

た暁は向う三軒両隣が尽く欧米人となつて土地を奪われ商工業を
壟断せられ、総ての日本人は欧米人の被傭者、借地人、借家人、
小作人、下男、下女となつて惴々焉懽々乎として哀みを乞うよう
になると予言したのもあつた。又離婚が盛んになつて総ての犬
が尽く合の子のカメ犬となつて了つたように、純粹日本人の血が
亡びて了うと悲観した豪い学者さえあつた。国会とか内地雑居と
かいうものが極樂のように喜ばれたり地獄のように恐れられたり
していた。

二十五年前には東京市内には新橋と上野浅草間に鉄道馬車が通
じていたゞけで、ノロノロした瘦馬のガタクリして行く馬車が非
常なる危険として見られて「お婆アさん危いよ」という俗謡が流

行つた。電灯が試験的に点火されても一時間に十度も二十度も消えて実地の役に立つものとは誰も思ひなかつた。電話というものは唯実験室内にのみ研究されていた。東海道の鉄道さえが未だ出来上らないで、鉄道反対の気焰が到る処の地方に盛んであつた。

二十五年前には思想の中心は政治であつた。文学が閑余の遊戯として見られていたばかりでなく、倫理も哲学も学者という小団体の書齋に於ける遊戯であつた。科学の如きは学校教育の一課目とのみ見られていた。真に少数なる読書階級の一角が政治論に触るゝ外は一般社会は総ての思想と全く没交渉であつて、學術文芸の如きは遊戯としての外は所謂聰明なる識者にすら顧みられなかつた。

二十五年前には文学士春の屋隴の名が重きをなしていても、世間は驚異の目を睜つて怪しんだ、けで少しも文学を解していなかった。議会の開けるまで惰眠を貪るべく余儀なくされた末広鉄腸、矢野竜溪、尾崎罌堂等諸氏の浪花節然たる所謂政治小説が最高文学として尊敬され、ジュール・ベルネの科学小説が所謂新文芸として当時の最もハイカラなる読者に款待やされていた。

二十五年前には外山博士が大批評家であつて、博士の漢字破りの大演説が樗牛のニーチェ論よりは全国に鳴響いた。博士は又大詩人であつて『死地に乗入る六百騎』というような韻文が当時の青年の血を湧かした。

二十五年前には琴や三味線の外には音楽というものが無かつた。

オルガンやヴィオリンは学校の道具であつて、音楽学校の養成する音楽者というは『螢の光』をオルガンで弾く事を知つて人であつた。音楽会を開いて招待しても嘆願しても聞きに來る人は一人も無かつた。

二十五年前には日本の島田や丸鬚の目方が何十匁とか何百匁とかあつて衛生上害があるという理由で束髪が行われ初め、前髪も鬢も鬢かもじも引詰めて小さく結んで南京玉の網を被せたのが一番のハイカラであつた。

二十五年前には「国民之友」が漸く生れたばかりで、徳富蘇峰氏が志賀、三宅両氏と共に並称せられた青年文人であつた。硯友社は未だ高等学校内の少年の団体であつて世間に顔出ししてなか

った。依然として国文及び漢文が文学の中堅として見られていた。二十五年前には今の日比谷の公園の片隅に、昔の大名の長屋の海鼠壁や二の字窓が未だ残っていた。今の学者町たる本郷西片町は開けたばかりで広いく、原の彼地此地にポツポツ家が建ち初めた。西片町の下植物園の近所には田があつた。東京の到る処に昔の江戸の残り物があつた。

二十五年は顧みると早いようだが、中々長い歲月である。大抵な大事業は計劃せられ、実行せられ、終結せられて十分余りある。昔の悠長な時代さえ前九年後三年、十二年で東北征伐の大遠征を終つてゐる。平家が亡びたのは其の勃興したる平治から初めて檀の浦の最後までが二十七年、頼政の旗上げから数えるとたった六七

年である。南朝五十七年も其前後の準備や終結を除いた正味は二十五年ぐらいなものであろう。世界を震撼した仏国革命も正味は六七年間である。千七百八十九年の抑々の初めから革命終つて拿破ポレオン破烈翁に統一せられた果が、竟にウワータールーの敗北（千八百十五年）に到るまでを数えても二十六年である。米国の独立戦争もレキシントンから巴黎条約までが七年間である。如何なる時代の歴史の頁を繙いて見ても二十五年間には非常なる大事件が何度も繰返されている。如何なる大破壊も如何なる大建設も二十五年間には優に樂々と仕遂げ得られる。一国一都市の勃興も滅亡も一人一家の功名も破滅も二十五年間には何事か成らざる事は無い。

博文館は此の二十五年間を経過した。当時本郷の富坂の上に住

つていた一青年たる小生は、壱岐殿坂を九分通り登った左側の「いろは」という小さな汁粉屋の横町を曲ったダラダラ坂を登り切った左側の小さな無商売屋造りの格子戸に博文館の看板が掛つていたのを記憶している。小生は朝に晩に其家の前を何度も通行した。此の小さな格子戸の中で日本の出版界の革命が計劃されていたとは誰しも想像しなかつたろう。

「日本大家論集」という博文館の最初の試みの雑誌が物議を生じた。其結果、出版法だか新聞雑誌条例だかの一部が修正された。博文館は少くも世間を騒がし驚かした一事に於て成功した。小生は此の「大家論集」の愛読者であつた。小生ばかりでなく、当時の貧乏なる読書生は皆此の「大家論集」の恩恵を感謝したのである。

う。

博文館が此の揺籃地たる本郷弓町を離れて日本橋の本町——今の場所では無い、日本銀行の筋向うである——に転じたのは、之より二年を経たる明治二十二年であつたと記憶する。博文館の活動は之から以後一層目鮮しかつたので、事毎に出版界のレコードを破つた。茲で小生は博文館の頌徳表を書くのではないから、一々繰返して讚美する必要は無いが、博文館が日本の雑誌界に大飛躍を試みて、従来半ば道楽仕事であつた雑誌をビジネスとして立派に確立するを得せしめ、且雑誌の編纂及び寄書に対する報酬をも厚うして、夫までは殆んど道楽だつた操觚そうこをしてプロフェツショナルとしても亦存在し得るような便宜を与えたのは日本の文芸の

進歩を助くるに大に力があつたのを何人も認めずにはおられぬだろう。

今日では新聞紙の発行が一つのビジネスであるのを何人も怪まないであろう。成島柳北や沼間守一が言論の機関としていた時代と比べて之を墮落と云うものあらば時代を解せざる没分^{わからず}曉の言として見らるゝであろう。其通りに雑誌も亦一つのビジネスであるが、二十五年前には僅に「経済雑誌」、「団々珍聞」等二三の重なる雑誌でさえが其執筆者又は寄書家に相当の報酬を支払うだけの経済的余裕は無かつたので、当時の雑誌の存在は実は操觚者の道楽であつて、ビジネスとして立派に成立していたのでは無かつた。従つて操觚者が報酬を受くる場合は一冊の著述をする外な

く衣食を助くる道は頗る狭くして完全に生活する事が極めて難かつた。雑誌がビジネスとして立派に成立し、操觚者がプロフェッショナルとして完全に存在するを得るに到つたは畢竟時代の進歩であるが、博文館が此の趨勢に乗じて率先してビジネスとしての雑誌を創め各方面の操觚者を集めてプロフェッショナルとしても存在し得る便宜を与へたる功績は決して争われないであろう。

凡そ何に由らず社会に存在して文明に寄与するの成績を挙げ得るは経済的に独立するを得てからである。誰やらが『我は小説家たるを榮とす』と声言したのは小説家として立派に生活するを得る場合に於て意味もあり權威もあるので、若し小説家がいままでも十八世紀のグラブ・ストリートの生活を離るゝ能わずして一

生慈善家の糧を仰ぐべく余儀なくさるゝならば、『我は小説家たるを榮とす』という声言は寧ろ滑稽であらう。

『我は米塩の為に書かず』というは文人としての覚悟として斯うなくてはならぬ。又文人に限らず、如何なる職業にしろ、單に米塩の為に働くというのは生活上非合理であつて、米塩は其職業に勞力した結果として自ずから齎らさるゝものでなければならぬ。然るに文学上の勞力がイツマデも過去に於ける同様の事情でイクラ骨を折つても米塩を齎らす事が無かつたなら、『我は米塩の為に書かず』という覚悟が無意味となつて、或は一生涯文学に志ざしながら到頭文学の為に尽す事が出来ずに終るかも知れぬ。

過去に於ける文学は多くは片商売であつて、今日依然光輝を垂

れてゐる大傑作は大抵米塩の爲め書いたものでないのは明かであるが、此の過去の事実を永遠に文人に強いて文学の勞力に対しては相當の報賞を与うるを拒み、文人自らが『我は米塩の爲め書かず』というは猶お可なれども、社会が往々『大文学はパンの爲めに作られず』と称して文人の待遇を等閑視するは頗る不当の言である。

今日の社会は經濟的關係なるが故に、士農工商如何なる職業のものも生活を談じ米塩を説いて少しも憚からず。然るに独り文人が之を口にする時は卑俗視せられて、恰も文人に限りては勞力の報酬を求むる權利が無いように看做されてゐる。文人自身も亦此の當然の權利を主張するを陋なりとする風があつて、較やもすれば昔の志士や隱遁家の生活をお手本としておる。

世界の歴史に特筆されべき二大戦役を通過した日本の最近二十五年間は総てのものを全く一変して、恰も東京市内に於ける旧江戸の面影を尽く亡ぼして了つたと同様に、有らゆる思想にも亦大変革を来したが、生活に対する文人の自覚は其の重なる事象の一つであらう。

二十五年前には文学は一つの遊戯と見られていた。しかも漢詩漢文や和歌国文は士太夫の慰みであるが、小説戯曲の如きは町人遊冶郎の道楽であつて、士人の風上にも置くまじきものと思われていた故、小説戯曲の作者は幫間遊芸人と同列に見られていた。勸善懲惡の旧旗幟きしを撞碎した坪内氏の大斧は小説其物の内容に対する世人の見解を多少新たにしたが、文人其者を見る眼を少しも

変える事が出来なかつた。夫故、国会開設が約束せられて政治休息期に入っていた当時、文学に対する世間の興味は俄に沸湧して、矢野とか末広とか柴とかいう政治界の名士が続々文学に投じて来たが、丁度仮装会の興に浮れて躍り狂っていたようなもので、文人其者の社会的価値を認めたからではなかつた。であるから政治家の変装たるデレスリーの亜流を随喜しておつても、眞の文人たる Dickens や サッカレー に対しては何等の注意を払わなかつた。当時の文学革新は恰も等外官吏の羽織袴を脱がして洋服に着更えさせたようなもので、外觀だけは高等官吏に似寄つて来たが、依然として月給は上らずに社会から矢張り小使同様に見られていたのである。

坪内氏が相当に尊敬せられていたのは文学士であつたからで、紅葉や露伴は如何に人氣があつても矢張り芸人以上の待遇は得られなかつたのである。団十郎が人に褒められても「役者にしては意外な人物だよ、」と云われた通りに、紅葉や露伴の感服されたのも「小説家にしては——」という条件付きであつたのである。

三文文学とか「チープ・リテチュア」とかいう言葉は今でも折々繰返されてるが、斯ういう軽侮語を口にするものは、今の文学を研究して而して後鑑賞するに足らざるが故に軽侮するのではなくて、多くは伝来の習俗に倅とらわれて小説戯曲其物を頭から軽く見ているからで、今の文学なり作家なりを理解しているのでは無い。イブセンやトルストイが現われて来ても渠等は矢張り三文文

学、チープ・リテチュアを口にするであらう。

然るに不思議なるは二十何年前には文人自身すら此の如き社会的輕侮を受くるを余り苦にしないで、文人の生活は別世界なりとし、此の別世界中の理想たる通とか粹とかを銜つて社会と交渉しないのを恰も文人としての当然の生活なるかのように思っていた。

渠等の多くは京伝や馬琴や三馬の生活を知っていた。売薬や袋物を売ったり、下駄屋や差配人をして生活を営んでる傍ら小遣取りに小説を書いていたのを知っていた、今日でこそ渠等の名は幕府の御老中より高く聞えてるが其生存中は袋物屋の旦那であつた、下駄屋さんであつた、差配の凸凹爺であつた。社会の公民としては何等の位置も権力も無かつたのである。渠等が幅を利かすは本

屋や遊里や一つ仲間の遊民に対する場合だけであつて、社会的には袋物屋さん下駄屋さん差配さんたるより外仕方が無かつたのである。

斯ういう生活に能く熟している渠等文人は、小説や院本は戯作というような下らぬもので無いという事が坪内君や何かのお底で解つて来ても、社会的には職業として完全に独立出来ず、位置も資格も権力も無い遊民と見られていても当然の事として少しも怪まなかつた。加うるに持つて生れた通人病や粹人癖から求めて社会から遠ざかつて、浮世を茶にしてシヤレに送るのを高しとする風があつた。当時の硯友社や根岸党の連中の態度は皆是であつた。尤も伝来の遺習が脱け切れなかつた為めでもあるが、一つには

職業としての文学の存立が依然として難かしいのが有力なる大原因となつてゐる。今より二十何年前にはイクラ文人が努力しても、文人としての収入は智力上遙に劣つてゐる労働階級にすら及ばないゆゑ、他の生活の道を求めて文学を片商売とするか、或は初めから社会上の位置を度外して浮世を茶にして自ら慰めるより外仕方が無かつたのである。

勿論、今日と雖も文人の生活は猶お頗る困難であるが二十何年前には新聞社内^にに於ける文人の位置すら極めて軽いもので、紅葉の如き既に相当の名を成してから読売新聞社に入社したのであるが、猶お決して重く待遇されたのでは無かつた。シカモ文人として生活するには薄い待遇を忍んで新聞記者となるより外に道が無

かった。今日の如く雑誌の寄書家となつて原稿料にて生活する事は全く不可能であつた。偶々二三の人が著述に成功して相当の産を作つた例外の例があつても、斯ういう文壇の当り屋でも今日の如く零細なる断片的文章を以てパンに換える事は決して出来なかつた。

夫故、當時に在つては文人自身も文学を以て生活出来ると思わなかつた。文人が公民権が無くとも、代議士は愚か区會議員の選挙権が無くとも、社会的には公人と看做されないで親族の寄合いに一人前の待遇を受けなくとも文人自身からして不思議と思わなかつた。寧ろ文人としては社会から無能者扱いを受けるのを当然の事として、残念とも思わず、憤慨するものも無かつた。

今より十七八年前、誰やらが『我は小説家たるを榮とす』と放言した時、頻りに其の意気の壮んなるに感嘆されたが、此の放言が壮語として聞かれ、異様に響きて感嘆さるゝ間は小説家の生活は憐むべきものであらう。が、当時は此の壮語を吐いて憤悶を洩らすものは一人も無かつたのである。

博文館の雑誌経営が成功して、雑誌も亦ビジネスとして立派に存立し得る事が証拠立てられてから、有らゆる出版業者は皆奮つて雑誌を発行した。文人が活動し得る舞台が著るしく多くなつた。文人は最早非常なる精力を捧ぐる著述に頼らなくても習作的原稿、断片的文章に由て生活し得るようになった。文人は最早新聞社の薄い待遇にヒシ／＼と縛られずとも自由に楽しんでパンを得る事が

出来るようになった。

斯うなると文人は袋物屋さんや下駄屋さんや差配人さんを理想とせずとも済む。文人は文人として相当に生活できる。仮令猶お立派に門戸を張る事が出来なくとも、他の腰弁生活を羨むほどの事は無い。公民権もある、選挙権もある。市の廓清も議院の改造も出来る。浮世を茶にせずとも自分の氣に入るように革新出来ぬ事は無い。文人の生活は昔とは大に違っている。今日では何も昔のように社会の落伍者、敗北者、日蔭者と肩身を狭く謙^へり下らずとも、公々然として濶歩し得る。今日の文人は最早社会の寄生虫では無い、食客では無い、幫間では無い。文人は文人として堂々社会に対する事が出来る。

今日の若い新らしい作家の中には二十五六年前には未だ生れない人もある。其大部分は幼稚園若くは尋常一二年の童児であつたろう。此の時代、文人の収入を得る道が乏しく、文人が職業として一本立ちする能わず、如何に世間から輕侮せられ、齒よわいされなかつたかは今の若い作家たちには十分レハイズする事が出来ぬであらう。今日でも文学は他の職業と比べて余り喜ばれないのは事実である。が、然し乍ら今日では不利益なる職業と見らるゝだけであるが、二十五六年前には無頼者の仕事と目されていた。最も善意に解釈して呉れる人さえが打つ飲む買うの三道楽と同列に見て、我々文学に親む青年は、『文学も好いが先ず一本立ちに飯が喰えるようになってからの道楽だ』と意見されたものだ。夫が今

日では大学でも純粹文学を教授し、文部省には文芸審査委員が出来て一年中の傑作が国家の名を以て選奨せらるゝようになった。文部省の文芸審査に就て兎角の議論をする人があるが政府は万能で無いから政府の行ふ処必ずしも正鵠では無い。且文芸上の作品の価値は区々の秤尺に由て討議し、又選票の多寡に由て決すべきもので無いから、文芸審査の結果が意料外なるべきは初めから予察せられる。之を重視するのが誤まつておるのだが、二十五年前には全然社会から無視せられていた文芸の存在を政府が認めて文芸審査に着手したのは左も右くも時代の大進歩である。

文学も亦一つの職業である。世間には往々職業というと賤視して擧蹙するものもあるが、職業は神聖である。賤視すべきもので

は無い。斯ういう職業を賤視する人たちの祖先たる武士というものも亦一つの職業であつて封建の家禄世襲制度の恩沢を蒙むつて此の武士という職業が維持せられたればこそ日本の大道楽なるかの如く一部の人たちに尊奉せらるゝ武士道が大成したので、若し武士が家禄を得る道なく生活の安全を保証されなかつたなら武士道如きは既に亡びて了つたであらう。文学を職業たらしむるだけの報償を文人に与えずして三文文学だのチープ・リテレチュアだのと冷罵するのみを能事としていて如何して大文学の発現が望まれよう。文学として立派に職業たらしむるだけの報酬を文人に与え衣食に安心して其道に専らなるを得せしめ、文人をして社会の継子たるヒガミ根性を抱かしめず、堂々として其思想を忌憚な

く発露するを得せしめて後初めて文学の発達を計る事が出来る。文人が社会を茶にしたり呪ったりするは文学の爲めにもならなければ国家の爲めにも亦不祥である。

そこで、左も右くも今日、文学が職業として成立し、多くの人中には大臣の園遊会に招かれて シルクハット 絹 帽 を被つて出掛けるものも一人や二人あるようになったのは、文人の社会的地位が昔から比べて重くなつた証拠であるが、我々は猶お進んで職業上の権利を主張し、社会上の勢力を張らねばならぬ。社会をして文人の存在を認めしめたゞけでは足りない。更に進んで文人の権威を認めしめるように一大努力をしなければならぬ。

小生は今は文学論をするツモリでないから、現在の文学其もの

に就ては余り多くを云わない。唯、文学論としてよりは小生一個の希望——文学に対する註文を有体に云うと、今日の享樂主義又は耽美主義の底には、沈痛なる人生の叫びを蔵しているのを認めないではないが、何処かに浮氣な態度があつて昔の硯友社や根岸党と同一氣脈を伝うるのを慊^{あきた}らず思つてゐる。咏嘆したり長　したり冷罵したり苦笑したりするも宜かろう。が、人生の説明者たり群集の木鐸たる文人はヨリ以上冷靜なる態度を持してヨリ以上深刻に直ちに人間の肺腑に蝕い入つて、其のドン底に潜むの悲痛を描いて以て教えなければならぬ。今日以後の文人は山林に隱棲して風月に吟誦するような超世間的態度で芝居やカフェーにのみ立籠つていて人生の見物左衛門となり見巧者訳知りとなつたゞけで

は足りない。日本の文人は東京の中央で電灯の光を浴びて白粉の女と差向いになつていても、矢張り鴨の長明が有為転変を夢なみて浮世を観ずるような身構えをしておる。同じデカダンでも何処かサツパリした思い切りのいゝ精進潔斎的、忠君愛国的デカダンである。国民的の長所は爰であらうが短所も亦爰である。最つと油濃く執拗く腸の底までアルコールに爛らして腹の中から火が燃え立つまでになり得ない。モウパスサンは狂人になつた。ニーチエも狂人になつた。日本の文人は好い加減な処で忽ち人生の見巧者となり通人となつて了つて、底力の無い声で咏嘆したり冷罵したり苦笑したりする。

小生は文学論をするツモりで無いから文学其物に就ては余り多

くを云うを好まぬが、二十五年前には道楽であつた文学が今日では職業となり、最早袋物屋さん下駄屋さん差配人さんを理想としないでも済むようになった事実を見て、職業としての文学が最う少し重くなければならぬ。文人の社会的地位が今一層高くなければならぬ事を痛切に感ずる。

有体に言うと今の文人の多くは各々蝸牛の殻を守るに汲々として互いに相褒め合ったり罵り合ったりして聊かの小問題を一大事として鎬を削つてゐる。毎日の新聞、毎月の雑誌に論難攻撃は絶えた事は無いが、尽く皆文人对文人の問題——主張対主張の問題では無い——であつて、未だ嘗て文人对社会のコントラバシーを、一回たりとも見た事が無い。恐らく之は歐洲大陸に類例なき日本

の文壇の特有の現象であろう。文人としての今日の欲望は文人同志の本家争いや功名争いでなくて、今猶お文学を理解せざる世間の群集をして文人の権威を認めしむるのが一大事であろう。

二十五年前と比べたら今日の文人は職業として存立し得るだけ社会に認められて来た。が、人生及び社会を対象とする今日以後の文人は、昔の詩人のように山林に韜晦する事は出来ない。都会に生活して群集と伍し、直接時代に触れなければならぬ。然るに文人に強うるに依然清貧なる隠者生活を以てし文人をして死したる思想の木乃伊^{ミイラ}たらしめんとする如き世間の圧迫に対しては余り感知せざる如く、蝸牛の殻に安んじて小二ヒリズムや小ヘドニズムを歌って而して独り自ら高しとしておる。一部の人士は今の文

人を危険視しているが、日本の文人の多くは、ニヒリスト然たる壁訴訟をしているに関わらず、意外なる楽天主である。

新旧思想の衝突という事を文人の多くは常に口にしておるが、新思想の本家本元たる文人自身は余り衝突しておらぬ。いつでも旧思想の圧迫に温和しく抑えられて服従しておる。文人は文人同志で新思想の蒟蒻屋問答や點頭き合いをしているだけで、社会に對して新思想を鼓吹した事も挑戦した事も無い。今日のような思想上の戦国時代に在つては文人は常に社会に對する戦闘者でなければならぬが、内輪同士では年寄の愚痴のような躁言を陳べてるが、外に對しては頭から戦意が無く沈黙しておる。

二十五年の歳月が聊かなりとも文人の社会的位置を進めたのは

時代の進歩として喜ぶべきであるが、世界の二大戦役を終つて一躍して一等国の仲間入りした日本としては文人の位置は猶お余りに憐れで無からう乎。例えば左にも右くにも文部省が功労者と認めて選奨した坪内博士、如何なる偏見を抱いて見るも穩健老実なる紳士と認めらるべき思想界の長老たる坪内氏が、経営する文芸協会の興行たる『故郷』の上場を何等の内論も質問もなく一令を下して直ちに禁止する如き、恰も封建時代の地頭が水呑百姓に対する待遇である。是れ併し乍ら政府が無鉄砲なのでも属僚が没^{わから}ず分曉^{ずや}なのでも何でもなくして、社会が文人の權威を認めないからである。坪内君が世間から尊敬せらるゝのは早稲田大学の元老、文学博士であるからで、舞踊劇の作者たり文芸協会の会長たるは

何等の重きをなしていないからである。

社会をして文人の權威を認めしめよ。文人は社会に対して宣戦せよ。『Murmur』するよりは『Strike』せよ、『Complain』するよりは『Curse』せよ。新らしき思想の世界を拓かんとする羊の如く山の奥に逃げ込まずに獅子の如く山の奥から飛出して咆哮せよ。

二十五カ年の歳月が文学をして職業として存立するを得せしめ、国家をして文学の存在を認めしむるに到ったのは無論進歩したには違いないが、世界の英雄東郷を生じた日本としては猶お余りにもどかしき感がある。今後の二十五カ年間、願くは更に一大飛躍あれ。文学の忠僕たる小生は切に諸君の健闘を祈る。

（「太陽」増刊 明治四十五年六月十三日号）

青空文庫情報

底本：「魯庵の明治 山口昌男、坪内祐三編」講談社文芸文庫、
講談社

1997（平成9）年5月9日第1刷発行

底本の親本：「続紙魚繁昌記」書物展望社

1934（昭和9）年4月10日

初出：「太陽」

1912（明治45）年6月

入力：斉藤省二

校正：松永正敏

2001年5月19日公開

2016年2月6日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

二十五年間の文人の社会的地位の進歩

内田魯庵

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>